

資本主義の暴力性

— 倉田稔の新著に寄せて —

藤女子大学人間生活学部人間生活学科

内 田 博

1 はじめに

倉田稔『グローバル資本主義の物語 その発展と矛盾』（NHK Books, 2000年）は、第1に、著者である倉田（以下、敬称は略す）の長年にわたるヒルファディング研究の成果であり、とりわけ最晩年のヒルファディングが提起した資本主義の暴力性という問題意識を継承したものである。

ヒルファディングは、ファシズムや全体国家の経験を踏まえて、歴史形成における暴力的契機の重要性を認識し、遺稿「歴史の問題」で唯物史観の再検討に着手した。そこでヒルファディングは、訳者解題で倉田自身が述べているように、暴力の問題を史的唯物論に組み入れようとし、それを哲学的に発展させ、社会学的に適用しようとした。それは、『金融資本論』でヒルファディング自身が提出した資本主義観に修正を迫る可能性をもつものであった。¹⁾

倉田は、このような問題意識を受け継ぐとともに、ヒルファディングが自己の帝国主義論の想源のひとつとしたホブソンの帝国主義論に遡って、本書で独自の資本主義史を提起した。そこでは、ホブソン—ヒルファディング—レーニ

1) 「歴史の問題」に対する倉田の評価に関しては、R.ヒルファディング『現代資本主義論』倉田稔・上条勇訳、新評論、1983年、234ページを参照。そこでのヒルファディングの議論が『金融資本論』に修正を迫るものであった点については、同書192ページ以下の国家論を参照。

ンに連なるとされる資本主義観とは異質な資本主義観が示されている。²⁾

第2に、本書は、資本主義のグローバル化が声高に叫ばれ、グローバル・スタンダード（実はアメリカのハウス・ルール）に依拠することが国民経済の発展の要であるかのように論じられている現状に対する、著者の危機意識が映し出されている。そして、こうした動きに部分的には連動して育成されている歴史修正主義の跳梁に対する危機意識も、本書には映し出されている。こうした危機意識は、著者が得意とする物語という語り口が採用されたことによって、初学者や市民にも理解しやすい形で、本書全体を通して伝わってくる。

この物語という戦略の重要性は、日々の講義においても痛感させられることであり、これはこれで独自に検討すべき価値をもつが、本稿では、それに触れる余裕はない。³⁾ また、物語られた内容の正当性にも立ち入らない。著者が提起した資本主義観の独自性を確認し、それと対決することが本稿の課題である。

2 本書の基本的な視角

2-1 グローバル資本主義

本書は、いくつかの基本概念的説明を踏まえて、世界資本主義の変化を、いわゆる重商主義時代から現代（1990年代）まで辿り、その問題点を明らかにし

2) 著者が最晩年のヒルファディングの問題意識を継承したとはいえ、著者とヒルファディングでは、当然、資本主義史の捉え方は違う。ヒルファディングは「歴史の問題」でも、重商主義、自由主義、新重商主義（帝国主義）という流れを想定しているが、倉田にとっては本論でも述べたように、自由主義は歴史のエピソードにすぎない。

3) 物語という方法は、論理構造が表面には現れず、プロットとして作品世界の背後の隠れているために、社会科学の文法に慣れている者にとっては、逆に理解しにくいという性格をもたざるをえない。しかし、初学者にとっての著者の物語作品の分かりやすさは、ただごとではない。ところが、病床で書かれたという事情のために、本書には、校正の至らないところや、用語や表現に十分に意を尽くしていないところが散見される。その一部は、すでに『商学討究』で著者が訂正を加えているが、紀要は著者が対象とした初学者や市民には手が届かない。本書再版の機会には、十分な手直しが望まれる。

ようとしたものである。

その基本視角をなすのは、第1に、資本主義は世界市場を対象としてのみ十分に発達しようという見地である。(本書、37ページ)

著者は確かに、資本主義を育てる国内的な要因を無視しはしない。第1章「グローバル資本主義の発展」において、資本主義を発展させる国内的要因として、農民解放と市民革命を挙げ、資本主義を確立させた要因として産業革命を挙げてはいる。しかしそれらの意義は低い。

農民解放は、土地からの生産者の分離としてのみ意味を持つにすぎない。著者にとって資本主義は、土地から分離した生産者の社会的な存在形態として、近代的労働者階級を無条件に必要とするわけではない。(本書、29-30、36ページ) 市民革命に関しては、それがなければ、その地域の資本主義はいびつな発展を遂げるとはいうが、ともかくも資本主義は発展しようのである。(本書、36ページ) 農民解放と市民革命は、社会思想史研究者でもある著者にとって、社会と人間を近代化するという思想史的な意義はもつが、近代化そのものと資本主義そのものとは、等価ではないのである。

また産業革命に関しては、著者は、機械の持続的採用が進み、そのくのに経済成長が進むという点は認める。しかし、産業革命は、重要産業での技術革新にすぎず、工業においても多くの手工業を抱え、さらに大工業と手工業を合わせた工業全体も、圧倒的な農業のなかに埋め込まれていたにすぎないという。産業革命に巻き込まれた産業では近代的労働者階級が形成されうが、それ以外の広範な産業では職人や農民が存在する。著者にとって、産業革命は、地主、資本家、労働者という三大階級からなる階級社会をもたらすものではなかった。

むしろ、産業革命とそれに先行する工場制手工業がイギリスで発展しえたのは、それが世界貿易を前提としたからであった。「イギリスのマニュファクチュアは、世界貿易を前提とする大規模なものであった。世界貿易を条件として、イギリスでは機械化がなされたのである。世界貿易を前提としないような資本主義は、十分には発展しない。」(本書、37ページ) この意味で資本主義の確立は、著者にとって、決定的に世界市場に依存していたのである。資本主義とは、

この意味でグローバル資本主義なのである。⁴⁾

2-2 帝国主義

著者の第2の基本視角は、こうしたグローバルに活動する資本主義が、同時に国際金融資本によって支配される帝国主義であるという見地である。

これは、帝国主義=金融帝国とする点で、著者がホブソンから得た着想である。しかし、ホブソンの帝国主義論の理論的な基盤をなす過剰貯蓄説=過少消費説は、著者は採用しない。また、ヒルファーディングとレーニンの線で提起された、段階としての、あるいは、変質した資本主義としての帝国主義という見方も採らない。「重商主義の時代が去って、自由主義、産業資本主義、自由競争資本主義の時代がやってきた、と経済学の教科書では書かれるが、そうではない。自由主義政策を採用した国は少なかったし、その自由主義も、イギリスでは実際は帝国主義であった。自由主義といわれる時代は、旧帝国主義から近代帝国主義への移行期である。」(本書、44ページ)「自由主義は、資本主義の歴史の一エピソードであるにすぎない。」(本書、40ページ)著者にとって、自由主義は資本主義把握の準拠枠ではもはやない。

帝国主義とは、著者にとって、資本主義諸国が植民地や従属地域など、他地域を直接あるいは間接に支配することを通して、資本の利益を追求するシステムであり、資本主義の歴史に貫通する資本の運動形態である。資本主義の歴史は、著者にとっては、旧帝国主義、過渡期としての自由主義、19世紀末からの

4) グローバル資本主義という言葉は、学問的な概念ではなくて、内容が曖昧な流行語である。(最近では、いくつかの学会でもこの用語を使用したシンポジウムが開かれているようだが、概念的に内容が確定されているわけではない。)また、グローバル・スタンダード(著者は、この言葉は使用していないが、本書のカバーでは使用されている)という言葉は、マスコミが作り上げた和製英語である。このように、グローバルという言葉にはある種のうさんくささがつきまとう。それにもかかわらず著者がグローバルという用語を選んだのは、ポピュラーな言葉を使用しながら、その含意を変容させつつ読者を引き込もうとする物語の戦略である。ここには、戦略に規定された戦術の巧みさと同時に、物語という戦略の危うさも表現されている。

近代帝国主義，第二次大戦後の新帝国主義と進む。

したがって，帝国主義を支配する金融資本も，著者にとっては歴史貫通的な概念であり，独占資本主義段階が生み出した特殊歴史的な資本概念というヒルファーディング—レーニンの意味では使用されない。さしあたり，国際的に活動する金融・投資・投機業者とおさえられている。(本書，14-16ページ)

この金融資本が帝国主義を支配する論理は，著者の場合にはホブソンと同様である。(本書，13-14，21-22ページ) 著者にとって，専門家としての巨大投資家は，金融市場の安定要因ではなくて，価格変動から利益をえる勢力である。

「巨大投資家としての国際金融資本の望みは，途方もなく大きな変動である。実際，巨大な変動は，戦争，国家破産状態，革命の転覆，恐慌，景気変動などによって起こる。だから，投資家はそれらを望むのである。」(本書，22ページ) こうした望みを実現するために，国際金融資本が国家機構を利用するのが，帝国主義である。

2-3 交渉力格差

第3の基本視角は，著者がやはりホブソンから継承したもので，市場における交渉力格差の存在である。ホブソンのヒューマニズム経済学の構想によれば，競争的であれ独占的であれ，市場は，取引当事者あるいは当事者集団間の交渉力格差を通して，不公正あるいは不平等な取引を実現するのであり，必要に応じた所得分配を実現しない。⁵⁾ 著者もこの見方に同意する。(本書，17-18ページ) そして，国際金融資本やそれが利用する国家機構が，世界市場において，この格差を創造し，維持し，利用しようとする—成功と失敗を含む—活動として，さらに，こうした活動とそれに対抗する様々な活動とが生んだ現象として，いわゆるグローバル資本主義の歴史を物語るのである。⁶⁾

5) J. A. ホブソン『異端の経済学者の告白 ホブソン自伝』高橋哲雄訳，新評論，1983年，172ページを参照。

6) 本稿の狙いとは直接の関係がなく，かつ本書の主題でもないのに，註に書くことにするが，著者は，社会主義圏の崩壊を現存社会主義の崩壊とした上で，本書の

157ページで、「マルクス流社会主義が倒れたのではない」と主張している。あたかも、レーニンが死んだが、マルクスの社会主義は生きているかのようである。その一方で、著者は、200-201ページでは、「真の社会主義とは何か」という小見出しをつけて、民主主義をもたない社会主義の抑圧性、議会制民主主義諸国における体制としての社会主義存続の困難、社会主義的国有化の非効率性を論じている。そこでは、「真の社会主義」を実現するのは困難であると捉えているかのようでもあるし、あるいは、それらとは別のところに「真の社会主義」を考えているかのようでもある。著者の真意が不明確である。しかし、著者が社会主義という言葉で表現されるなものに、資本主義への対抗を期待したいと考えているであろうことは、伝わってくる。

私も、かつて様々な社会主義思想が資本主義批判として提起した論点の意義を否定しはしないが、以下の3点で著者の立場に反対する。

第1に、マルクスの社会主義と現存社会主義を切断するのは非歴史的な態度であり、歴史を扱う本書の枠組みを逸脱していると考えからである。マルクス派の社会主義を歴史的に捉えるならば、現存社会主義は、現在の研究者が研究を通して再構成したマルクスの社会主義の含意とかけ離れているにしても、少なくともそれを実現しようとした運動の思想に内在すれば、マルクスの思想を現実化しようとした産物として捉えられるべきである。その限りで、マルクス流の社会主義と現存社会主義との連続面をも捉えるべきである。社会主義の現実に対する責任をマルクスに負わせるとか、そこからマルクスを免責するとかいった政治闘争的なレベルとはまったく次元を異にした学問的な意味で、私はこう考える。

第2に、社会主義という冠を被った運動、思想、体制は、当事者の意識においては、資本主義への対抗運動であった。しかし同時に、世界システム論が主張しているように、資本主義が生んだその補完物でもあったのではないか。(たとえば、半周縁)とすれば、社会主義の対抗的性格だけでなく、その補完的性格も本書で指摘すべきではなかったか、という点である。(たとえば、冷戦時代の米ソの経済的な相互依存関係)

第3に、—これは、本書の範囲を完全に超えてしまうのだが—かつての社会主義に学ぶべき点があったとしても、「真の社会主義」や「マルクス流の社会主義」を持ち出すのではなくて、社会主義とはまったく異なった思想的枠組みを構築し、そこに学ぶべき点を移植し、読み替えるという作業を行うべきではないか、ということである。たとえば、地域通貨の扱いがそうであろうし、集住実験がそうであろう。どちらにしろ、参加当事者には、それが社会主義起源であることは意識されていない。しかし、紛れもなく社会主義の産物であり、社会主義という枠組みを離れて、コミュニケーション・プロセスを再構築する試みとして注目を集めている。そこでは、社会的交通=コミュニケーション・プロセスの再構築というマルクス主義的な課題が、社会主義とは別の方向で、模索されているのである。

3 倉田グローバル資本主義論の意義と限界

2で見たように、著者の資本主義像の特徴は、資本主義＝世界資本主義＝帝国主義であり、その動因は国家機構を利用しつつ交渉力格差を生み出しながら活動する国際金融資本である、というものであった。

このような資本主義観にたてば、自由主義的資本主義をモデルとして、資本－賃労働関係が全面的に支配するという想定で展開される経済モデルは、原理論の地位を失い、特殊理論に後退することになる。それゆえ、こうした原理論からの論理的展開として形成される社会化論的帝国主義論も、帝国主義の一般理論から特殊理論へと後退することになる。

この意味で、本書における著者の仕事は、マルクス経済学の古典的な枠組みを破壊して、新しい政治経済学を構築しようとする1980年代以降の多様な試みに属する。そのなかでも、世界資本主義論の視角、金融と国家＝暴力の重視という点で、著者の立場は、一見すると世界システム論に近い。しかし、決定的に異なっているのは、第1に、世界システム論における中心と周辺に相当するものが著者にはあるが、半周辺に相当するものがないという点である。第2に、資本主義＝帝国主義という見方である。

世界システム論にとっては、半周辺の存在は、世界システムの構造を安定させる契機のひとつであり、安定化されたシステムは、循環する変動や危機にさらされながらも、つねに構造の同一性を維持する。そのかぎりでは、世界システム論が捉える資本主義の歴史は、歴史をどこで輪切りにしても金太郎飴のように同一の構造が現れる静態的なものである。金子勝の言葉を借りていえば、ウオーラーステインが見失っているのは、「資本主義世界経済は閉鎖系ではないがゆえに、不可逆的な歴史的变化をとげているという点である。ウオーラーステインが描く『世界システム』は、まるでニュートン力学系のように、中心－周辺を両極にして、コンドラチェフ波動によって絶えず同じ循環を繰り返す『力学法則』のような世界であって、統計力学のような不可逆的变化を示す歴史そ

のものではない。…それはとてつもなく静態的な枠組みである。」⁷⁾

半周辺をもたない倉田の世界資本主義論は、そうした静態的な歴史把握を免れ、歴史における行為の一回性や不可逆性を十分に意識した歴史叙述を行っている。この点で、倉田の描く世界資本主義は、ダイナミックである。

しかし、倉田の世界資本主義は、世界システム論の構造的同一性とは違う意味で、平板な議論に陥っている。それは、資本主義＝帝国主義という理解に関わる。

私は、資本主義を帝国主義であるという倉田の着想そのものは評価する。そこには、資本が、完全な自律性を備えて自己運動するものではなくて、国家という暴力装置に依存しながら運動するものであることが表現されていると考えられるからであり、さらにいえば、交渉力格差を生みだし、維持するために、国家以外の様々な暴力装置を資本は利用するということが、当然、そこに含意されているからである。それは、暴力を内生化させたものとして経済メカニズムを把握するという着想を与えてくれる点で、学ぶべき点の多いものであった。⁸⁾

問題はそうではなくて、著者が資本主義の歴史を重商主義＝旧帝国主義、自由主義＝過渡期、帝国主義＝近代帝国主義、戦後＝新帝国主義と段階的に位置づけているのに、それらの行動様式の相違が明確に現れてこず、逆に、暴力性においてそれらが共通しているという側面が、強調されることである。その結果、戦略的な商品の相違や具体的な出来事の違いは描かれているものの、叙述

7) 金子勝「近未来社会への構想力」『情況』西暦1998年6月号、25-26ページ。

8) 財に価値を与える希少性は、経済財と人間の欲望に関わる自然的事実ではなく、一方における過剰と他方における希少は、ガルブレイスが指摘しているように、制度的に生み出されるものなのではないか。そして、様々な市場形態とそれを取り巻く制度形態は、過剰と希少を生み出すメカニズムの差を表しているのではないか。暴力が、こうした過剰と希少を生み出す契機のひとつであるとすれば、こうしたメカニズムのなかに暴力を組み込むこと（市場形態と制度形態へのどのよう暴力が組み込まれているのかは、それぞれの市場と制度の性格、両者の組み合わせに依存する）が必要であろう。そしてこれは、マルクス経済学が、経済理論の歴史的前提として扱ってきたもの、それゆえに経済理論から排除してきたものを、再び経済理論に組み入れる試みでもある。

が全体的に平板になっている。

それは根本的には、著者が、各段階の構成原理とメカニズム、ある段階から次の段階に移行する論理を、本書で展開していないからである。たしかに若田部が指摘しているように、「日本の経済学教育がとりわけ学部の段階で機能していない」⁹⁾ 現状では、初学者や市民向けの著作である本書に、そうした構造的・論理的な議論を求めるのは無理であろう。著者が物語という戦略を選択した時点で、こうした議論は切り捨てられねばならなかったはずである。そうした戦略的意図は了解できるが、それにも関わらず、この点は本書の大きな弱点であるといわざるをえない。

これに関連するもう一つの大きな問題は、自由主義（厳密に言えば市場的自由主義）の問題である。

旧帝国主義、近代帝国主義の時代は、資本と国家の国際的行動を正統化するのに自由主義を掲げはしなかった。市場的自由主義は、アダム・スミスの存在が示すように、旧帝国主義に対しては、むしろ批判理論であった。また、近代帝国主義の時代には、自由主義が多様化していたとはいえ、帝国主義を正統化して恥じない自由主義は、その社会ダーウィン主義的な亜流にすぎなかった。ぎゃくに、著者が想源としたホブソンのような良質な社会的自由主義者あるいは新自由主義者は、帝国主義に対する有力な批判者であった。著者も採りあげたセシル・ローズのように、みずから帝国主義者を名乗る人物すら現れたのが、この時代であった。（但し、ほとんどすべての思想を聖戦論に加担させた第一次大戦の時期には、結果として帝国主義を正統化しなかったのは、ごく一部の社会主義者、平和主義者、自由主義者、民族主義者のみである）それゆえ著者も、これらの時代の世界経済、世界政治をあつかうところでは、自由主義的な動きに関して紙幅を割かない。

これら二つの時期とは反対に、過渡期としての自由主義の時代と、新帝国主

9) 若田部昌澄「知識，メディア，経済学：メディアの経済学に向けてのノート」『メディアと経済思想』第2巻（2001年1月），21ページ。

義の時代には、それと相反する動きを併存させながらも、国際政治や国際経済において自由主義が標榜される。(そのため著者も、とりわけ、本書の40%を占める新帝国主義=戦後世界資本主義を扱うところでは、自由主義的秩序形成の動向に著述の多くを割いている。)

たとえば、過渡期としての自由主義の時代には、国家と資本の行動を正統化する代替案は保護主義であったが、その保護主義にしても、リストにしる、それに影響されたアメリカ体制派経済学にしる、結果的には市場的自由主義への移行を視野に入れたキャッチアップのための議論であった。新帝国主義においては、他国民の自由を抑圧する国際警察行動が、自由を実現する手段として正統化されるのであり、自由貿易体制を守るために輸出を自主規制するのであり(80年代日本経済)、経済自由化を推し進めるためにグローバル・スタンダードに従うのである。保護主義はある程度は承認されるが、それは自由化への準備段階として一時的に許されるにすぎない。

このように、資本主義の歴史が帝国主義の歴史であったとしても、自由主義の位置と機能は異なっている。さらに新帝国主義の時代の世界経済にしても、ブレトン・ウッズ体制の崩壊前と崩壊後では、世界的な市場的自由主義と諸国民経済との関係は、大きく変化している。

ところが、著者は、こうした相違が生み出されるメカニズムを明らかにしていない。市場的自由主義を本来の経済秩序と考える立場が経済学においては主流であり、かつ、著者がそれに反対しようとする以上、自由主義に関する著者の扱いは不十分である。自由主義的経済秩序を天上から地上に引き下ろすためには、それが歴史の産物であることを明らかにしなければならないだろう。もちろんこれには多様なアプローチが可能である。しかし、グローバル資本主義の歴史的变化を叙述するという本書の枠組みでそれを行うとすれば、「アダム・スミスの呪縛」(本書、19ページ)をいうだけでは足りない。ある時期にはなぜ自由主義が帝国主義の正統化原理として登場し、ある時期にはなぜ正統化原理としての自由主義が消えるのかが、事実在即して示されねばならない。また、そうした位置と機能の変容の中で、自由主義の内実がどう変化したのかも、物

語の主題と構造を破壊しない範囲内で、できる限り示されるべきである。本書は、こうした叙述が欠けている点で、自由主義批判として弱い。

以上の点は、著者が想定する読者層と著者の戦略とを考えれば、一見すると無理な注文に見えるかもしれない。しかし、現状では、著者が想定する読者層に対して、メディアを通した市場万能論の働きかけが積極的におこなわれているし、部分的にはすでに、市場万能論が読者層の生活を巻き込んでいる。ウオーラーステインは「アフター・リベラリズム」について語ったが、市場万能論的な自由主義は、諸国家の防壁を越えて深化・拡大しているものであり、リベラリズムに対するアフターを見定めがたいのが、現状でもある。こうした点を踏まえるならば、前述したように、自由主義をより丁寧に扱うことが、読者に対する著者の働きかけをいっそう強めることになったのではないだろうか。

4 終わりに

以上で見てきたように、私にとって、著者の議論は、暴力を内生化させた経済理論の可能性を示してくれた点で、意義のあるものであった。しかし、ひとたびそうした観点から本書を読み返すと、第1に、いかなるメカニズムの相違から資本主義の暴力性の相違が現れてくるのかという点、第2に、そうした暴力性を正統化する原理がいかに現れてくるのかという点で、本書の叙述は不十分なものであった。この第1点が、諸帝国主義の種別性に関する取り扱いに対する私の批判へとつながり、第2点が、正統化論としての自由主義の取り扱いに対する批判へとつながっている。

物語という著者の戦略から見て無理な批判となっている点もあるので、単なる書評であれば、私の議論はないものねだりのルール違反かもしれない。しかし私は、本稿を数年に及ぶ著者との研究交流の一環と考えている。いわば、著者の庭先を借りて、論文の形で著者と研究会を行っているつもりで本稿を書いた。その意味では、著者には是非リプライをお願いしたい。